「日々の理科」（第 2273 号） 2020,10,-2

「八ッ場ダムの水陸両用バス（７）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーションセンター研究員

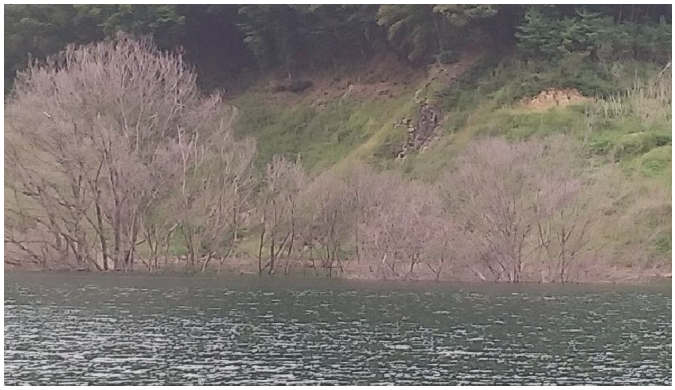
田中　千尋　Chihiro Tanaka

水陸両用バスが「ドバー！フワー」と湖に入ってしまえば、山中湖や檜原湖の遊覧船と乗り心地は変わらないように感じた。

公道走行時は、当然道路交通法が適用になるが、船舶としての航行時はその必要はない。ガイドさんも「シートベルトをはずしてもＯＫです。窓から顔を出してもＯＫです」と、急に規則がゆるくなった。湖面ではゆっくりなので、強い風も、波しぶきも入ってこない。

普通のバスは湖に突っ込んだら、そのまま沈んでしまうだろう。しかし何らかの方法で浮力を得ているはずで、フワフワ浮きながら、スイスイ進んでいる。湖への進入路はダム湖のかなり上流部にある。そこから転舵して、ダムのある下流へと航行する。ガイドさんが色々説明してくれるからいいが、それがなかったら居眠りしてしまいそうだ。

橋の上から見ると、こんな風に見える。見た目は完全にバスなのだが、確かに浮いているし、水上を走っている。屋根には、航行灯や船舶無線のアンテナもついている。私は操縦士さんに、浮力、エンジン、それに舵の仕組みを聞いておけばよかったと思った。



八ッ場あがつま湖は、貯水が始まってからまだあまり時間が経っていない。湖底や湖畔にあった樹木は、低水位時には水面から頭を出す。大きな建物や線路は、貯水前に撤去される。樹木は伐採せずに、そのまま水没させてしまうのだ。

やがて大きな橋の下をくぐる。この橋は、水没前に列車から見えたあの橋で、「八ッ場大橋（湖面１号橋）」という。主として、対岸に移動した新しい河原湯温泉街へのアプローチの為に建造されたものである。橋の上からはバンジージャンプもできるという。その第一号挑戦者は、長野原長町だったそうだ。